

教養教育の理念における合意に向けて

—B.A.キンバルの歴史研究を手がかりに—

中 村 夕 衣

はじめに

大学設置基準の大綱化が実施された1991年以降、日本では各大学レベルにおいて、教養教育の再編が進められている。そうした教養教育の再編では、大学教育のもう一つの柱である専門教育とバランスをとることが求められる。しかし専門教育がその意義を明確に提示しやすいのに比べ、教養教育は専門教育の入門として位置づけられることも多く、その意義や理念を主張することは容易ではない。

たとえば1990年代に頻繁に唱えられたグローバル化の進展は、科学技術の分野におけるグローバル・スタンダードへの志向を強め、実用的な知識を身につけさせる専門教育の拡充を求める傾向をもたらした。学生や大学、あるいは企業にとっても、指標がはっきりとしていて目に見える形で成果を示す専門教育の意義は理解しやすい。他方で、教養教育において、その意義を図る明確な指標を見出すことは難しい。

そのため教養教育については、それぞれの大学が学生のニーズや学部構成などの個別の環境を活かしつつ、現代の時代状況を踏まえ、その意義を模索している。たとえば、多文化社会の出現に注目し、外国語教育の充実や多様な文化を学ぶための科目の増設を行っている大学、あるいは「グローバル」というキャッチフレーズのもとに、グローバルに考えローカルに行動する人間の育成を目指すことを掲げる大学などがある。

こうした取り組みの多くは、大学内に設置された大学教育のカリキュラムを研究、開発する機関において行われている。それぞれの大学に設置された専門の機関が、授業実践や学生のアンケートなどを行い、その大学の環境に適した教養教育の形態を作りあげている。また、少子化の問題もあって、大学の個性化が求められる風潮のなか教養教育のあり方にも独自性を求める傾向が強まっている。このように教養教育のカリキュラムがそれぞれの大学において考案されている状況では、「教養教育とは何か」というように、その理念について原理論を展開するような哲学的な研究はあまり求められなくなる。

では、こうした状況にあって、教養教育を教育学という学問において研究することの意義はどこに見出すことができるのだろうか。それぞれの大学がそれぞれの教養教育の現場に足場をおきつつ教養教育論を展開しているなか、教養教育の理念を統合的な形で語ることはもはや無意味なのだろうか。教養教育の理念についての研究を行うのであれば、どのようなスタイルの研究が教育学という学問に求められているのだろうか。

このような問題意識から本稿では、教養教育の理念について合意を形成するための研究の方法論を明らかにすることを目的とする。その際、歴史的な観点から教養教育論 (liberal education

論)を研究しているB.A.キンバル(Kimball, B.A.)の議論に焦点をあてる。アメリカの大学は周知の通り、多様な文化的背景をもった学生から構成され、さらに大学の形態も日本以上に多様化している。様々な価値基準が林立するなかで、キンバルは、教養教育の理念を歴史的な観点から考察し、現代のアメリカに共通する教養教育の課題を見出している。彼の研究は、『弁論家と哲学者(Orators & Philosophers)』と『アメリカの教養教育の状況(The Condition of American Liberal Education)』の二つの著作にみることができる。この二つの著作を手がかりに、彼が教養教育の理念についての合意を如何にして形成しようとしたのかを考察する。

一、アメリカにおけるliberal education論の状況：B.A.キンバルの研究の背景

本章では、キンバルの研究の背景を理解するために、1980年代後半から1990年代にかけてのアメリカのliberal education論の概要について整理する。

アメリカの大学では、1980年代後半から文化戦争と呼ばれる一連の論争が繰り広げられた。その争点の一つが、liberal educationのカリキュラムをめぐるものである。文化戦争の発端となったスタンフォード大学のカリキュラム改革では、必須科目であった「西欧文化」が「文化・思想・価値」に取って代われ、その是非を問うliberal education論が戦わされた¹。たとえば、liberal educationの理念において西欧文化を必須とすることがどのような意味をもっていたのか、あるいは、非西欧文化を学ぶ機会を与えることがliberal educationの理念とどのように一致するのかなどが争点となった。

1987年に出版された『アメリカン・マインドの終焉』において、A.ブルーム(Bloom, A.)は、学生がニヒリズムに陥っていることを問題視し、西欧の古典をliberal educationの核とするべきである、という議論を展開した²。

他方、アフロセントリズムを唱道する立場から多文化主義の擁護をはかるM.K.アサンテ(Asante, M.K.)は、黒人の学生が無力感を抱いていることを問題視し、大学のカリキュラムについて議論している³。黒人の学生が将来にたいして無力感を抱いている理由をアイデンティティの揺らぎに求めるアサンテは、黒人文化におけるアイデンティティの確立を重視する。こうした問題意識からアサンテは、それぞれの文化的な背景を学べるようなカリキュラムを支持している。

一般にブルームのように西欧文化の価値を擁護する論者は、非西欧の諸文化の価値を擁護する論者から、西欧中心主義であると批判される。他方アサンテのように非西欧の諸文化を擁護する主張は、諸文化を超えた共通の価値の追及を放棄している、すなわち文化相対主義に陥っていると批判されている。この対立はときに右派と左派の図式において捉えられ、ときに新保守主義と多文化主義の図式において捉えられる⁴。

このような対立図式におけるliberal educationの諸議論は、従来の議論の枠組みとは異なっている。以前のliberal education論においては、自然科学と人文科学のどちらを重視すべきかという点や専門教育との関係をどのように考えるかという点、あるいは職業教育はliberal educationに含まれるのか否かという点などが一般的な争点であった⁵。ところが、西欧中心主義と多文化主義との間で戦わされている文化戦争における争点は、それまでのliberal education論において前提とされていた事柄へと向けられている。問題はliberal educationそれ自身が、西欧文化において長い歴史をもつ教育理念であるということにある。すなわち、liberal educationにおいて西

欧文化を必須とするかどうかは、単なるカリキュラム上の問題ではなく、liberal educationの基盤をも揺るがす問題なのである。

それでは以上のようなアメリカのliberal education論の展開を背景に、キンバルはどのような方法論をもってliberal educationの理念についての研究を行っているのだろうか。次章では、『弁論家と哲学者』と『アメリカのliberal educationの状況』の二つの著作を手がかりに、キンバルのliberal educationについての研究を概観する。

二、B.A.キンバルによるliberal education研究

(1) liberal educationにおける二つの系譜

キンバルは、その著書『弁論家と哲学者』においてliberal educationの理念に二つの系譜があることを明らかにしている⁶。議論の筋を簡単に述べると次のようになる。liberal educationには「弁論家の系譜」と「哲学者の系譜」の二つがある。この二つの系譜において受け継がれてきた二つの理念のバランスを図ることが、liberal educationにとって重要なことである⁷。ところが、現在のアメリカの議論では「哲学者の系譜」が支配的となっている。したがって、両系譜の理念のバランスを図るために、現代では「弁論家の系譜」にある理念を再認するべきであるとキンバルは指摘している。

このようなキンバルの議論を理解するには、まずは「弁論家の系譜」と「哲学者の系譜」の各々にみられるliberal educationの理念の概略を整理しなければならない。キンバルは、二つの系譜において受け継がれているliberal educationの理念を、artes liberalesとliberal-freeという二つの概念によって示している⁸。artes liberalesは、古代ギリシアの弁論家、イソクラテスに起源をもち、古代ローマのキケロによって継承され、中世のキリスト教世界で定着するなかで形成された理念と位置づけられている⁹。他方、liberal-freeは、古代ギリシアの哲学者ソクラテス、プラトンに起源をもち、artes liberalesが支配的であった中世ではスコラ哲学によって見直され、近代の啓蒙思想家や科学者などによって広められた理念と位置づけられている¹⁰。

「弁論家の系譜」にあるliberal education、すなわちartes liberalesの中心命題は、一般的に共有された知識を公的な場で表現する「市民」の教育にある¹¹。そのため、公的な場で表現をするために必要な「言語に関する知識」と、表現内容に関する「共有された知識」が重視される。ここでいう「言語に関する知識」とは、「修辞学」に象徴されるものである。そしてこの「修辞学」は、単に文法や表現法を学ぶだけではなく、問題の立て方、発言の場での態度や作法なども含んでいるものと理解される¹²。すなわち、言語の習得を通じて、一般に共有されている行動様式、さらには思考様式を学ぶことを意味しているのである。もちろん、このような一般に共有されている行動様式や思考様式は、受け継がれてきた価値秩序に基づいている。そのため「言語に関する知識」を学ぶことは、同時に表現内容としての「共有された知識」を内面化することをも含んでいるといえる。したがってartes liberalesの理念は、受け継がれてきた価値秩序の内面化によって価値規範を形成することにある、とまとめられる。

そしてこの価値規範の形成の際に「古典」が用いられることも、artes liberalesの理念の特徴である¹³。こうした価値規範の形成は、公的な場へ参加する「市民」のみに要請される。したがって、対象が原則的にエリートに限られていることもまたこの理念の特徴である¹⁴。

他方、「哲学者の系譜」にあるliberal educationすなわちliberal-freeの中心命題は、知識それ自体を探究することができるような「個人」の教育にある¹⁵。こうした中心命題をもつliberal-freeの理念では、何よりも個人の「自由」が重視される¹⁶。そのため、artes liberalesでは重視される"受け継がれてきた価値秩序"も、liberal-freeの理念では個人の「自由」を阻害するものとなる¹⁷。なぜなら、liberal-freeの理念は、伝統的な価値秩序という制約から解放されなければ、個人が自由に知的な探究を進めることができないという考えにしたがっているからである。

そして、価値秩序から「自由」になることを求めるliberal-freeは、古い知識に対して「批判的懐疑」を向けることを重視する¹⁸。この「批判的懐疑」は、個人のもつ知性や合理性といった理性的な側面を拠り所とする。また、このような理性的な側面は原則的にすべての人がもっているとされるため、liberal-freeの理念は、エリートのみを対象とするartes liberalesの理念に比べ平等主義的である¹⁹。さらに、「個人」の成長や「個人」の意志を強調するのもliberal-freeの特徴である。すなわちliberal-freeの理念において重視されるのは、私的な側面における「個人」とその知的な成長ないし発達なのである。

このようにartes liberalesとliberal-freeは、対照的な特徴をもつ理念である。それは、キンバルが指摘する二つの理念の危険性についても同様である。artes liberalesは、特定の価値秩序の内面化を重視する。そのため、基盤となる価値秩序を絶対視する傾向、すなわちドグマティズム（教条主義）に陥る危険性がある²⁰。他方liberal-freeは、伝統的な価値秩序に対する批判的懐疑の態度を重視する。そのため、あらゆる価値秩序を疑う傾向、すなわちニヒリズム（虚無主義）に陥る危険性がある²¹。キンバルが二つの理念のバランスを重視するのは、それぞれの理念がもつこのような危険性を解消するためでもある。

以上みてきたように、artes liberalesとliberal-freeはそれぞれに異なった理念をもつ。それゆえ、liberal educationの解釈は、どちらの理念を重視するかによって異なることになる。たとえば、アーノルド対ハックスリー、ハッチンス対デュイなどのliberal educationをめぐる論争も、このliberal educationの解釈の相違から生じていると説明される²²。

さらに、キンバルは時代ごとでどちらの理念が優勢かということも説明する。どちらの理念でliberal educationを解釈するかは、個々の論者によっても異なるため、細かくliberal educationの論争を追うだけでは、そうした時代ごとの変遷は見えてこない。だが、視野を広げてその時代時代を概観すれば、たとえばルネッサンス期には人文主義者たちによってartes liberalesの理念が重視されたなど時代ごとの特徴が見出される²³。こうした歴史的な観点から、キンバルは現代ではliberal-freeの理念が優勢であると結論づけ、artes liberalesの理念を再認するという課題を提示しているのである²⁴。

(2) プラグマティックなliberal education

liberal educationについての歴史研究からartes liberalesとliberal-freeとの二つの理念を見出したキンバルは、その後の研究において新たな概念、「プラグマティックなliberal education」を提示している。キンバルは、第一章でみたような1980年代以降のアメリカにおけるliberal education論を、長きにわたって支配的であった哲学者の系譜に対する弁論家の系譜の再起であり、プラグマティックなliberal educationという新たな伝統の誕生と位置づけている²⁵。

ここで次の二つの疑問が生じるだろう。一つ目は、プラグマティックなliberal educationとは何かという疑問である。二つ目は、「プラグマティズム」という概念を用いたliberal education論は、どのような点においてartes liberalesとliberal-freeの枠組みを提示した研究と関連しているのか、という疑問である。本節では、キンバルが提示しているプラグマティックなliberal educationについて、それ以前の研究とのつながりをも視野に入れたうえで考察を進める。

まず、プラグマティックなliberal educationの特徴について言及する前に、キンバルが「プラグマティズム」をどのように解釈しているのかについてみる必要があるだろう。

キンバルは、アメリカにおけるプラグマティズムの歴史を、ジェームズやパース、デューイの諸思想から現代のネオ・プラグマティズムの登場まで概観したうえで、以下の六つの特徴をもつものとしてプラグマティズムを解釈している²⁶。

- ①信念と意味、真実それ自体でさえも、誤りを免れず、訂正されうる。
- ②審理の実験的な方法は、すべての科学と反省的な思考において成功する。
- ③信念、意味、真実は、それらが形成される共同体の文脈と間主観的な判断に依存している。
- ④経験は、有機体と環境とのダイナミックな相互作用であり、思考と行動の間の密接な相互関係に帰着する。
- ⑤疑問を解いたり問題を解決することの目的は、すべての思考と審理とに本質的なことである。
- ⑥すべての審理と思考は評価を行うものであり、事実判断と価値判断との間に違いはない。

このようなプラグマティズムの特徴のなかから、キンバルは特に真理の誤謬性、および事実判断と価値判断の同時性を強調し、artes liberalesとliberal-freeを見出した際の研究方法も、プラグマティズムに立脚したものであると説明している²⁷。そのうえで彼は、普遍的で本質的なliberal educationはないと考え、各時代のコンテクストにおいてliberal educationないしliberal artsという概念がどのように用いられてきたのかを考察する方法をとっている。

ところが、古代ギリシアから現代のアメリカまでの長い期間においてliberal educationの二つの系譜を見出す彼の研究に対しては、その一般化された解釈の妥当性を細かな事実をもって疑う論者も少なくないようである²⁸。キンバルはそうした批判に対して、プラグマティズムの思想を土台にした方法論を踏まえていることを強調し、自身の研究を正当化している。確かにartes liberalesとliberal-freeの二つの理念は、歴史的な観点からliberal educationの諸解釈を一般化することで導き出されている。その一般化が妥当か否かは、liberal educationの現象を説明し理解することをどれだけ助けているかによって判断されるという²⁹。つまり本質的なliberal educationはなく、すべての事実判断は価値判断を伴っているというプラグマティズムの思想を踏まえているということである。

このようにキンバルは『弁論家と哲学者』における研究の方法を「プラグマティックな歴史的方法 (pragmatic historical method)」と呼び、反省的にプラグマティズムの思想と結びつけることで、その後の研究との一貫性を示している³⁰。そのうえで、1980年代後半以降のアメリカについて、彼はartes liberalesとliberal-freeに代わるプラグマティックなliberal educationの伝統の誕生をみている。

そのプラグマティックなliberal educationについて、キンバルはliberal educationにおけるプラグマティズムの影響を検証し、七つの特徴を挙げている³¹。この七つの特徴は以下の三点にま

とめられる。第一に、多文化主義を容認すること。第二に、奉仕あるいは慈善に従事することを奨励し、コミュニティとシティズンシップを強調すること。第三に、一般教育を強調し、学生の学習と探求を中心にした教育のあり方を模索することである。

これらはすべて、liberal education論においてすでに主張、実施されている事柄のなかから、キンバルがプラグマティズムの影響を受けていると判断し抽出した要素である。たとえば、多文化主義を容認することは、多様な文化において認められている真理をそれぞれ尊重するということであり、真理の誤謬性を認め、真理は共同体のコンテクストに依存するというプラグマティズムの考えに立脚しているという。また、コミュニティやシティズンシップを重視することは、共同体内における実践や経験を重視するプラグマティズムの傾向と一致している。

では、プラグマティックなliberal educationの伝統の誕生は、『弁論家と哲学者』における課題、すなわちartes liberalesの理念の再認という課題とどのような連続性があるのだろうか。

この点についてキンバルは、ネオ・プラグマティズムをartes liberalesと結びつけて解釈することから説明している³²。彼はネオ・プラグマティズムを説明する際に、反形而上学という側面をもつことを強調し、それはまさにartes liberalesの理念がliberal-freeの理念に対して常に突きつけてきた批判であるという。すなわち、ネオ・プラグマティズムの思潮はartes liberalesを再認する流れにあるということである。したがって、プラグマティックなliberal educationの伝統も、基本的にはartes liberalesの理念を再認することの延長上にあると考えられている。

このようにartes liberalesの理念との連続性をも示しつつ、liberal education論のなかからプラグマティズムの影響を受けていると考えられる点を挙げ、キンバルはプラグマティックなliberal educationの具体的な形を示している。ただし、これらの諸要素はいつも欠かさず含まれていなければならないという訳ではなく、こうした要素のいずれかを含んでいれば、プラグマティックなliberal educationに協調しているということである³³。

こうした議論を展開することで、文化戦争以後の多くのliberal education論において、プラグマティックなliberal educationの理念をみることができる、とキンバルは主張する。一般には、右派と左派あるいは新保守主義と多文化主義などの対立において捉えられる文化戦争のliberal education論争において、キンバルは対立点のなかからも多くの議論に共通する新たな傾向を見出そうとしているといえる。

三、キンバルの研究の意義と課題

以上のように、キンバルのliberal education研究は、古代ギリシアから現代のアメリカまでの膨大なliberal education論を通して、artes liberalesの理念とliberal-freeの理念とを見出した『弁論家と哲学者』と、「プラグマティックなliberal education」という枠組みを用いて、現代のliberal education論の新たな傾向を分析する『アメリカのliberal educationの状況』とにみることができるといえる。

両者ともに一貫するのは、歴史的な視座を保ち続けているという点にある。「プラグマティックなliberal education」に関しては、アメリカの歴史に限定された議論ではある。とはいえ、その場合もartes liberalesとliberal-freeとの二つの系譜の流れは絶えず意識されている。それは、たとえばネオ・プラグマティズムをartes liberalesの再認の流れに位置づけることなどにみるこ

とができるだろう。

しかし、こうした試みが完全に成功しているとは言い難い。もちろん、彼の研究に対しては批判も寄せられている。『弁論家と哲学者』に関しては、研究賞が与えられるなどの定評があるものの、「プラグマティックなliberal education」については、多くの批判がある。たとえば、「プラグマティックなliberal education」の特徴は、artes liberalesではなくliberal-freeに近いものではないかという疑問が寄せられている³⁴。この疑問は、プラグマティックなliberal educationが、真理の誤謬性を認めるということを前提としていることへの批判である。もう少し説明すれば、そうした前提は、伝えられてきた価値規範をそのまま伝授しようとするartes liberalesの理念よりも、伝えられてきた価値規範には誤りがあるかもしれないとして懐疑の目を向けるliberal-freeの理念と共通しているということである。そうであれば、キンバル自身が主張していることと反対に、「プラグマティックなliberal education」の議論は歴史研究での問題関心から離れてしまっていることになる。

また、キンバルが提示する「プラグマティズム」がポストモダニズムに規定されたものである、という批判もある³⁵。このような批判は、ポストモダニズムの主張とliberal educationの理念とがそもそも相容れないことを前提にしている。ポストモダニズムは、大学を「政治的な場」とみなし、さらに反本質主義の立場をとる。大学を「政治的な場」とみなすというのは、学問や教育が権力関係によって規定されているという解釈を意味する。さらに、このような解釈は、大学において支配的であった西欧的な文化や知識に対して批判的であることを正当化する。そのため、プラグマティックなliberal educationは、artes liberalesの理念とは相容れないのではないか、という反論がもたらされることになる。

では、こうした批判を受けつつも、キンバルが歴史的な視座を保ちつつ現在のliberal education論の動向を考察したことの意義は、どこにあるのだろうか。

キンバルは、liberal educationにおける二つの理念を、単に歴史的な事実として解き明かしているのではない。それは、彼が自身の研究方法をプラグマティックな歴史研究の方法論と名付けていることから分かる。すなわち、事実判断は常に価値判断を伴っているということであろう。彼は、liberal-freeに偏っている現代の動向の限界を指摘するとともに、その解決策として、現代のliberal education論においては失われつつあるもう一つの理念としてartes liberalesの理念を歴史のなかから救い出している。言い換えるならば、キンバルの歴史研究は、現代のliberal education論における問題の在処を指摘し、その解決策を提示するという側面をもっているということである。

こうした方法論は、キンバルの言葉に即していえば、「ある論題を検証する際、記述的、規範的目的に絡んだ歴史学上の問題を解決することを試みた方法」である³⁶。ここでいう「記述的」、「規範的」ということが、それぞれ事実判断と価値判断に対応していると考えられる。規範的な主張を伴うことに意識的になりつつ、歴史上の様々なliberal education論の記述を行うことこそ、キンバルが『弁論家と哲学者』において試みた方法論である。

こうした方法論を、自ら「プラグマティックな歴史的方法」と呼び、そのうえでプラグマティックなliberal educationの新たな登場を議論したことからも分かるように、キンバルは、プラグマティズムの思想を自身の研究の柱としている。言うまでもなく、プラグマティズムはアメリカ生

まれの代表的な思想である。文化戦争と呼ばれる状況のなかでliberal education論が右派と左派の間で分裂しているときに、キンバルは、それを危機として捉えるのではなく、liberal education論の新たな展開の始まりとして捉えた。

このような捉え方を支えているのは、第一に、彼がすでに歴史研究を通じてartes liberalesとliberal-freeという二つの理念を見出していたことにあると考えられる。すなわち、現代の論争の渦中に巻き込まれることなく、それを冷静に分析する視点を持ち合わせていたということである。また第二に、彼がartes liberalesの再認という課題をそのまま固持するのではなく、アメリカ生まれの思想であるプラグマティズムとの共通点を模索したことにあると考えられる。言い換えるならば、右派と左派の対立の土台にある思潮としてプラグマティズムを見出し、「プラグマティックなliberal education」と名付けることで、liberal education論の新たな合意を形成する方途を模索したといえるということである。

したがってキンバルが見出したプラグマティックなliberal educationへの評価は、artes liberalesとliberal-freeの二つの理念の対立を調停することや、それら二つの理念を乗り越える理念という観点からのみ行われるべきではないだろう。キンバルの議論からすればプラグマティックなliberal educationはあくまでもartes liberalesの理念を継承するものとして見出されている。つまり、liberal-freeの理念が支配的になったために生じた学生のニヒリズムの問題を解決することが、プラグマティックなliberal educationにも求められているのである。プラグマティックなliberal educationがartes liberalesの理念と異なるのは、それが文化戦争において激化する右派と左派の対立を調停することにある。言い換えるならば、歴史研究との連続性を保ちつつ同時代の対立のなかに共通の解釈の可能性を見出したことにこそ、彼の研究の意義があるということである。

もちろん、先にみたように、このプラグマティックなliberal educationの理念については、artes liberalesの理念の延長上に捉えることはできない、という根本的な批判がもたらされており、文化戦争に関してのキンバルの研究が成功しているとは言い難い。そして、このキンバルの研究の限界は、彼が依って立つプラグマティズムの思想が抱える問題でもある。たとえば、プラグマティズムの思想が真理の誤謬性を認めるのであれば、プラグマティズムもまたポストモダニズムが陥っている相対主義の問題を抱えることになるという問題が挙げられる。

このような課題が残っているものの、文化戦争において西欧文化というliberal educationの基盤が揺らぐなかにあればこそ、キンバルの歴史研究が、現代のliberal educationの理念を支えている歴史を再認していることの意義は見出されるのではないだろうか。現代のliberal education論の問題に足場をおきつつ、歴史的な観点からliberal educationの合意を形成しようとするキンバルの試みは、多様なliberal education論が混在し、ときに激しい分裂がもたらされる文化戦争において、liberal education論を新たな角度から議論する視座を切り開いたといえよう。

おわりに

以上のように、本稿ではキンバルのliberal education論に焦点をあて、教養教育の理念における合意へ向けて、教育学が担うべき研究方法についての考察を行った。

キンバルは『弁論家と哲学者』において、古代ギリシアから現代までのliberal educationある

いはliberal artsの理念を分析し、そのなかからartes liberalesとliberal-freeの二つの系譜を見出していた。その後『アメリカの教養教育の状況』では、liberal educationの理念をめぐる衝突が続いている現代のアメリカにおいて、プラグマティックなliberal educationという新たな理念が創出されつつあると分析している。このプラグマティックなliberal educationに関する議論は、artes liberalesとliberal-freeの二つの理念を提示した『弁論家と哲学者』における議論との一貫性を欠いているようにもみえる。

けれどもこの研究において重要なことは、二つの理念を見出したことよりも、多様にみえる現代のliberal education論が実はliberal-freeの理念に偏っていると指摘したことにある。つまりこの研究の主眼は、過去のliberal educationに関する諸議論に目を向け、現代の論争の全体的な特徴や傾向を分析したところにある。

このようにキンバルは、歴史的な観点を導入することで、現代の諸議論のうちに共通の傾向と問題を見出している。したがって『弁論家と哲学者』における議論も、プラグマティックなliberal educationの創出を分析した研究と同じく、liberal educationの理念の合意形成へと向けられた研究であるといえる。

こうした合意形成を目的とするキンバルの研究は、liberal educationの理念あるいは概念の変遷を考察するというスタイルをとっている。そのため、議論の内容は抽象度の高いものとなっている。だがキンバルは、そうした抽象度の高いliberal educationの理念を扱っていながらも、歴史的な文脈を押さえ、かつ同時代的な問題関心を持ち続けており、原理論を展開する哲学研究に向けられるような批判を免れている。

キンバルのこのような研究のスタイルは、現在の日本においても求められているといえないだろうか。はじめに述べたように、日本では教養教育論の多くが各大学の現場からもたらされ、教養教育の理念については合意を得ることが困難な状況にある。このような状況を問題視するのであれば、歴史的な文脈や現代的な問題関心を欠いた原理論を展開する種の哲学的な研究や、現場における実証的な研究とは異なるスタイルの研究が求められるだろう。歴史的な観点から行われる理念や概念の研究を進め、多様化しているかにみえる教養教育論に共通する傾向や課題を見出すことが、教養教育の理念における合意形成への手がかりとなる。またそうしたスタイルの研究を進めるとともに、キンバルの研究方法の基盤となっているプラグマティズムの思想についても考察を深めていくことが、教育学における一つの重要な役割となりえるだろう。

【引用文献】

- Asante, M.K., 1996, "Multiculturalism and the Academy", *Academe-Bulletin of the AAUP*, 82(3), pp.20~23.
- Bloom, A., 1987, *The Closing of the American Mind : How Higher Education has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, New York : Simon & Schuster.
- Farnham, N.H., 1995, "After Pragmatism, What?", in Orill, R.(ed.), *The Condition of American Liberal Education : Pragmatism and a Changing Tradition*, New York : College Entrance

- Examination Board, Part 2, pp.192~197.
- Glyer, D. and Weeks, D.L., 1998, "Liberal Education: Initiating the Conversation" in Glyer, D. and Weeks, D.L. eds. *The Liberal Arts in Higher Education : Challenging Assumptions, Exploring Possibilities*, Lanham : University Press of America, Inc., ix-xv.
- Kimball, B.A., 1995a, *Orators & Philosophers : A History of the Idea of Liberal Education (Expanded Edition)*, New York : College Entrance Examination Board.
- 1995b, "Toward Pragmatic Liberal Education", in Orill, R.(ed.), *The Condition of American Liberal Education : Pragmatism and a Changing Tradition*, New York : College Entrance Examination Board, Part 1, pp.1~122.
- Menand, L., 1995, "Marketing Postmodernism", in Orill, R.(ed.), *The Condition of American Liberal Education : Pragmatism and a Changing Tradition*, New York : College Entrance Examination Board, Part 2, pp.140~144.
- Orill, R.(ed.), 1995, *The Condition of American Liberal Education : Pragmatism and a Changing Tradition*, New York : College Entrance Examination Board.
- Rorty, R., 1989, "Education, Socialization, and Individuation", *Liberal Education*, 75(4), pp.2~9.
- Thiessen, E.J., 1993, *Teaching for Commitment : Liberal Education, Indoctrination, and Christian Nurture*, Montreal : McGill-Queen's University Press.
- 松浦良充, 1999, 「リベラル・エデュケーションと『一般教育』：アメリカ大学・高等教育史の事例から」『教育学研究』, 第66巻, 第4号, pp.39~48.
- 松尾知明, 1999, 「高等教育カリキュラムと多文化主義：スタンフォード大学の事例を中心に」『比較教育学研究』第25号, pp.151~168.

【脚注】

- ¹ 松尾知明, 1999, 「高等教育カリキュラムと多文化主義：スタンフォード大学の事例を中心に」『比較教育学研究』第25号, pp.151~168.を参照。
- ² ブルームは、学生がニヒリズムに陥っている原因を文化相対主義や歴史相対主義などの相対主義に根ざした思想の蔓延にみている。ブルームは、古典こそが学生に憧れの念をもたせることで相対主義の考えから脱却させ、ニヒリズムの問題を克服させるものと考えている。Bloom, A., 1987, *The Closing of the American Mind : How Higher Education has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, New York : Simon & Schuster. (=1988, 菅野盾樹訳『アメリカン・マインドの終焉：文化と教育の危機』みすず書房.)
- ³ Asante, M.K., 1996, "Multiculturalism and the Academy", *Academe-Bulletin of the AAUP*, 82(3), p.20.
- ⁴ Rorty, R., 1989, "Education, Socialization, and Individuation", *Liberal Education*, 75(4), pp.2~9.
- ⁵ Glyer, D. and Weeks, D.L., 1998, "Liberal Education: Initiating the Conversation" in Glyer, D. and Weeks, D.L. (eds.), *The Liberal Arts in Higher Education : Challenging Assumptions, Exploring Possibilities*, Lanham : University Press of America, Inc., ix-xv.
- ⁶ キンバルの研究に関しては、松浦良充, 1999, 「リベラル・エデュケーションと『一般教育』：アメリカ大学・高等教育史の事例から」『教育学研究』, 第66巻, 第4号, pp.39~48. / Thiessen, E.J., 1993, *Teaching for Commitment : Liberal Education, Indoctrination, and Christian Nurture*, Montreal : McGill-Queen's University Press.を参照。
- ⁷ Kimball, B.A., 1995a, *Orators & Philosophers : A History of the Idea of Liberal Education (Expanded Edition)*, New York : College Entrance Examination Board, pp.239~241.
- ⁸ 現代のアメリカについての分析では、この二つの中間に *artes liberales accommodation* と

liberal-free accommodationという概念枠組みが用いられている。けれども、ここでは軸となるartes liberalesとliberal-freeの理念をみることにする。

⁹ Kimball, B.A., 1995a, *op.cit.*, p.13.

¹⁰ Featherstone, J.L., 1995, "Foreword to the First Edition " in Kimball, B.A., *Orators & Philosophers : A History of the Idea of Liberal Education* (Expanded Edition), New York : College Entrance Examination Board, p.xvii.

¹¹ Kimball, B.A., 1995a, *op.cit.*, p.37.

¹² *Ibid.*, p.24.

¹³ *Ibid.*, p.38.

¹⁴ *Ibid.*, p.38.

¹⁵ *Ibid.*, p.119.

¹⁶ *Ibid.*, p.119.

¹⁷ *Ibid.*, p.141.

¹⁸ *Ibid.*, pp.120~121.

¹⁹ *Ibid.*, pp.121~122.

²⁰ *Ibid.*, p.38.

²¹ *Ibid.*, p.237.

²² アーノルドは、artes liberalesの系譜においてliberal education を解釈し、文学作品などの伝えられてきたものの価値を擁護する。それに対し、ハックスリーは自然科学など批判的な思考を身につけることをliberal educationの課題とみなし、liberal-freeの系譜にたっている。また、古典(Great Books)の唱道者であるハッチンスも基本的にはartes liberalesの理念にしたがっており、他方デューイは古典教育が教条主義に陥ることに対し批判的な見解を示し、科学的な思考法を重視したことからもliberal-freeの理念を擁護しているといえる。ただし、批判的な思考力を身につけるためにも古典が重要であるという議論を展開するハッチンスの場合は、liberal-freeへの志向性も持ちあわせており、キンバルは、"artes liberales accommodation"と名付けている。*Ibid.*, pp.171~173. (アーノルド対ハックスリーについて)、pp.179~180. (ハッチンス対デューイについて)。

²³ 時代ごとにどちらの理念が優勢であるかについては図で示されている。*Ibid.*, pp.xii~xiii.

²⁴ *Ibid.*, p.237.

²⁵ *Ibid.*, p.xiv.

²⁶ Kimball, B.A., 1995b, "Toward Pragmatic Liberal Education" in Orill, R.(ed.) *The Condition of American Liberal Education : Pragmatism and a Changing Tradition*, New York : College Entrance Examination Board, Part 2, pp.17~45.

²⁷ *Ibid.*, p.19, 26~27.

²⁸ キンバルはここで具体的な論者を挙げている訳ではなく、1960年代から1970年代にかけて「ローカルな歴史(local history)を研究した歴史家が、特殊な歴史的コンテクストを厳密に分析することを重視しており、そうした流れを組む歴史研究者がもちだす批判を取りあげている。Kimball, B.A., 1995a, *op.cit.*, p.ix~x.

²⁹ *Ibid.*, p.x.

³⁰ Kimball, B.A., 1995b, *op.cit.*, pp.11~15.

³¹ プラグマティックなliberal educationの七つの特徴は、以下の通りである。①多文化主義を容認すること。②諸価値と奉仕への関心をもつこと。③共同体と市民性を重視すること。④一般教育を重視すること。⑤大学と他の教育段階とが協同すること。⑥学習と探求としての教授を行うこと。⑦評価を行うこと。*Ibid.*, p.83~99.

³² *Ibid.*, pp.54~58.

³³ *Ibid.*, p.97.

³⁴ Farnham, N.H., 1995, "After Pragmatism, What?", in Orill, R.(ed.), *op.cit.*, Part 2, pp.192~197.

中村：教養教育の理念における合意に向けて

³⁵ Menand, L., 1995, "Marketing Postmodernism", in Orill, R.(ed.), *op.cit.*, Part 2, pp.140~144.

³⁶ Kimball, B.A., 1995b, *op.cit.*, p.83.

(日本学術振興会特別研究員、比較教育政策学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

A Study of the Idea of Liberal Education's Consensus: Focusing on Kimball's Historical Study of Liberal Education

NAKAMURA Yui

In recent years, many universities reconstituted liberal education in Japan. They proposed the ideas of liberal education and investigated the environment of liberal education. In such situations, it is difficult to find out the role that pedagogy plays in the study of liberal education. To clarify, we consider the methodology, mainly on making consensus of studying the idea of liberal education and focus on Kimball, B.A. who studied the idea of liberal education from the historical point of view. In *Orators & Philosophers*, he discovered that since the time of ancient Greeks there were two ideas of liberal education, artes liberales and liberal-free. And he insisted that it is important to maintain balance between the two ideas. He further indicated that the idea of liberal-free has become the prevailing idea in America since the late 19c. So, he pointed out the necessity of re-recognizing the idea of artes liberales. However, in *The Condition of American Liberal Education*, he changed his insistence. He discusses the "pragmatic liberal education". In the latter half of 1980's, there was a raging discussion, which was called the "cultural war", about liberal education. He found the new idea of liberal education, and pragmatic liberal education came along. In this paper, I will examine the studies of methodology within the context of discussion of liberal education in America and consider the methodology, mainly on making consensus of the studying of liberal education in Japan.